

令和8年度 第1回豊田市生涯学習審議会 会議録

- 日時 令和8年6月25日(木) 午後3時30分から午後5時
- 場所 豊田市役所南庁舎5階 南52会議室
- 出席者 [豊田市生涯学習審議会委員] (敬称略 50音順)
- 垣花里夏 (豊田市立竜神中学校 地域学校共働本部 地域コーディネーター)
- 加藤牧枝 (豊田市立前山小学校長)
- 熊本ゆう子 (市民公募)
- 後藤誠一 (国立大学法人東海国立大学機構 岐阜大学
地域連携推進本部地域協学センター 副センター長) 【副会長】
- 杉浦智江 (公益財団法人豊田市文化振興財団 豊南交流館 館長)
- 鈴木章子 (豊田市立青木小学校 地域学校共働本部 地域コーディネーター)
- 長江秀昭 (市民公募)
- ブイ ティ セン (チェ・ベトナム (市民活動団体))
- 牧野篤 (学校法人大正大学地域創生学部地域創生学科 教授) 【会長】
- 松井大輝 (一般社団法人豊田青年会議所 生きる力共創委員会委員長)
- 築瀬歩 (豊田市地域スポーツクラブ会議 代表幹事)
- 山田圭 (豊田市立藤岡中学校長)
- 事務局
- 八木健次 (魅力創造部 部長)
- 藤田憲彦 (学び体験推進課 課長)
- 秋山宏旭 (学び体験推進課 副課長)
- 近藤由子 (学び体験推進課 担当長)
- 竹内祐衣 (学び体験推進課 主査)
- 熊谷明典 (教育部 部長)
- 岸本勝史 (教育部 教育監)
- 水野美和 (学校教育課 課長)
- 清水昭子 (学校教育課 副課長)
- 上坂政仁 (学校教育課 指導主事)
- 中西裕也 (学校教育課 指導主事)
- 下川良佳 (学校教育課 担当長)

次第

- 1 開会・あいさつ
- 2 委員自己紹介
- 3 会長・副会長の選出
- 4 議 事
 - (1) 令和8年度豊田市生涯学習審議会について
 - (2) 地域学校協働活動の全国的な状況と事例について
 - (3) 意見交換「各委員の活動の現状と今後の期待について」
- 5 閉会

会長・副会長選出

会長に牧野篤委員を選任

副会長に後藤誠一委員を選任

A 委員

先ほど、市長部局と教育委員会の間で、地域学校共働本部に対する期待や求めるものが異なり温度差があると率直に話されたが、これは豊田市だけの問題ではなく、全国的にも同じ状況になっている。これだけ率直に話せる自治体は少なく、豊田市がそれだけ真剣に考えているということだと思う。

第9次豊田市総合計画の策定にも関わったが、本計画ではこども起点で、地域が一体となってこどもを育てていくと定義されており、この生涯学習審議会もその一環として位置付けられている。

豊田型のコミュニティ・スクールは国が提唱したものと異なり豊田市独自のものとなっており、それをより活性化していくということ。また、まち全体の魅力をつくりあげていくものとして、学校と地域がどう連携してこどもたちを育てていくのか、こどもも含めていきいきと生きられるまちをどうつくっていくのかが問われている。ぜひ委員のみなさまからご意見をいただき、事務局でまとめて方向性を出していただきたい。

議事

(1) 令和8年度豊田市生涯学習審議会について

事務局

資料に基づいて説明

議事

(2) 地域学校協働活動の全国的な状況と事例について

A 委員

平成27年の中央教育審議会では、急速な社会変化やAIの進展を見据え、従来の知識詰め込み型教育から転換し、こどもたちが自ら探究し、新たな価値を創造できる力を育成する方針が示された。第4期教育振興基本計画でも、こどもを「社会の担い手」ではなく「社会の創り手」として育成することが重視されている。

その実現に向けて、①探究的な学びを進めるアクティブラーニングの推進と、学校と地域が連携して学びの循環をつくること、②教員の多忙化を解消し、こどもと向き合う時間を確保するため、学校をチームとして運営すること、③こどもが探究的な学びを深められるように地域でこどもに寄り添う関係をつくり、地域総がかりでこどもを育てること、この三つの方向性が示された。

こうした考え方のもとで、学校運営協議会や地域学校協働本部を備えたコミュニティ・スクールが推進され、学校と地域が両輪となってこどもを社会全体で育てることが目指された。しかし、地域と学校の相互理解や連携が十分に進まず、現在も課題が残っている。

豊田市では、各学校に学校運営協議会と地域学校共働本部を設置し、中学校区ごとに学校と地域が相互に連携しながら、地域の方々がこどもを核として共働する関係づくりを進めている。そして、9年間を見通したこどもたちの学びと育ちを地域全体で支えていくことを目指している。これは、豊田市ならではの魅力あるコミュニティ・スクールの姿であると認識している。

一方で、地域の学校に対する見方や、教員の多忙な状況が十分に改善されていない現状もあり、目指す姿と現状との間にはまだ隔たりがあると感じている。

だからこそ、この取組をさらに一歩前へ進め、こどもたちを真ん中に据えながら、次の世代が自ら人生を切り拓き、社会をつくっていく力を育んでいく必要がある。そして、そのために大人たちが本気で関わり、支え合うことで、地域そのものがより魅力的なまちへと成長していくのではないだろうか。

本審議会においても、こうした視点を念頭に置きながら、議論を深めていただきたいと思う。

B 委員

岐阜大学と岐阜県との共同設置であるぎふ地域学校協働活動センターでは、地域学校協働活動の推進員向けの初任者研修や横のつながりをつくるグループワーク、フォローアップ

ブ研修などを実施。また、現場に教員等を派遣して伴走支援等をしたり、大学生ボランティアを派遣したりしている。

また事例として、岐阜県坂祝町では、地域学校協働本部に外国籍の保護者も参画する多文化共生委員会を設け、こどもたちが互いの文化体験や学び合い、交流を行う事業を展開している。

議事

(3) 意見交換「各委員の活動の現状と今後の期待について」

A 委員

本日は顔合わせでもあるため、委員のみなさまがどのような立場からこどもたちにどう関わっているのかを相互に理解する場としたい。

第9次豊田市総合計画で示されたこども起点のまちづくりの「起点」は、こどものために注力するということではなく、こども目線で考えるということ、あるいはこどもを大切にすることで大人自身も幸せになっていくという意味が込められている。

それぞれのお立場から、こども×地域をテーマにそれぞれの現状と期待することや、豊田市の状況や、学校と地域の関わりのあり方がどう見えているのかなどについてお話いただきたい。

C 委員

梅坪小学校の地域コーディネーターをしているほか、昨年度までは梅坪台地域会議の委員として活動していた。梅坪台地区の地域会議では、地域の中でこどもとの関わりが薄れてきているということを過去2年地域課題として取り組み、令和7年度には地域課題の解決に向けて市へ提言を行った。

地域での取り組み内容の事例として、地域とこどもをつなぐ会として、5月に進級お祝い会、12月にクリスマス会と年2回イベントを実施。もともとは、これらのイベントは子ども会で実施していたが、子ども会のなり手がおらず低調になっていることを発端として、自治区やコミュニティ会議等でやれないか模索したが、最終的にはこどもたちや学校との連携・調整に精通した地域学校共働本部が事務局となり実施している。

A 委員

子ども会の活動を代わったということか。それとも、子ども会はまだ存続しているか。

C 委員

地域学校共働本部の活動は地元の高齢者に呼びかけをすることで、既存の子ども会の活動とすみわけている。子ども会は現存している。

A 委員

全国各地で、子ども会やPTAなど従来の学校区を基本とした組織や団体が担い手不足と

なっている。また、関わっている方々が徐々に他人事になってきて、自分は負担を感じるから関わらないということが全国で起きている。

学校を中心にしながら、地域学校共働本部が従来の様々なこどもを中心とした活動をしているという事例で、今後の可能性となるかもしれない。

D 委員

旭小学校の敷島地区の学区では、市民団体が学校と関わって授業や野外活動等を支援している。ただ、旭地区では学校の統廃合が進んでおり、学校がない地区にはこどもたちが行きづらく、またそこに住んでいる地域の大人も、なかなか学校に手伝いに行きづらい状況が起きている。

小学校区が広がったからこそ、地域と学校がどう関わるか、地域が持っているスキルや能力を活かして一緒に活動できないか、などを小学校の地域学校共働本部と一緒に模索している。

また、旭地区の小学校は2校あるが、お互いに話をする機会があまりなく、連携がとれていなかった。今年度は交流館が各小学校をつなぐ企画（川の探究をする川遊びの企画、高校生が中学生に教える企画）を計画している。

旭地区では、自治区ごとにこどもたちをどう育てていきたいか考えて活発に活動しているが、地域が広いため保護者が送迎しないとこどもたちが参加できないという課題もあり、現在はこどもたちの居場所づくりに取り組んでいる。

A 委員

旭地区の事例をお話いただいたが、全国でも同じ状況になっている。地縁組織などは小学校区を基本につくられているが、学校の統廃合で地縁組織の範囲と学校の範囲がずれ始めており、学校単位で考えることが難しくなっている。

豊田市では中学校区ごとに交流館があり、交流館がうまくつないだという事例。その中で、こどもたちの居場所づくりや、こどもと関わる大人たちが相互に交流するという動きが出てきたという話。これも一つの可能性だと思う。

E 委員

アジア・アジアパラ大会に向けた取り組みの一環として、講師として市内中学校を訪問し、ベトナムの文化や学校の生活の違い等を伝える活動に参加している。

こどもたちはとても積極的に参加し、多くの質問や意見を出してくれて嬉しかった。この経験から、こどもたちは異なる文化に触れることに興味を持っていると感じた。そのため、日本のこどもと外国籍のこどもが一緒に参加できる交流、体験活動を増やしてほしい。SNS等で、ときどき学校でのいじめや差別に関する投稿がみられる。

こどもは学校で問題があるとどこに相談すればよいか分からない。交流会等があれば相互に理解する機会になるほか、こどもたちがわくわくしながら参加できる企画があればさらに多くの交流が生まれるのではないかと期待している。

A 委員

アジア・アジアパラ大会をきっかけに E 委員が中学校を訪問して交流活動を行うなかで、こどもたちが積極的に参加してくれているということ、一方で学校でのいじめ等様々な問題があるため、相互に文化に触れ合い理解する企画が多くあるとよい、こどもたちもそういった機会に魅力を感じるのではないかとということ。

豊田市は外国籍の方が多く住んでいる。この社会を支える一員として同じ市民としてどう生活していくかということも問われている。

F 委員

スポーツ推進審議会にも参加しているが、様々な制度を学区ごとに考えるとどうしても格差が生まれてしまう。下山地区は生徒数が少なく野球部やサッカー部がつかれないため、とよた地域クラブ活動では越境ができるようにしてほしいとお伝えした。

各地区独自の文化もあるため個別最適化が必要という議論も当然あると思うが、田舎からできないということがないようにしたい。豊田市と合併する前の年にしもやまスポーツクラブを立ち上げて、市街地でこどもたちが習っているスポーツを少しでも下山地区でも提供できるようにという思いで活動しているが、学区ごとで閉鎖的になってしまうと、学区を超えて交流することが難しくなってしまうのではと懸念している。

平成 12 年のスポーツ振興基本計画にうたわれてからスポーツクラブが全国的に展開され、現在 3, 500 を超えるスポーツクラブが立ち上がっている。愛知県でも総合型地域スポーツクラブ連絡協議会というネットワークをつくり、越境して活動できるよう工夫している。以前、しもやまスポーツクラブ、朝日丘スポーツクラブ、一色スポーツクラブという山側、街中、海側のこどもたちが集まり交流するキャンプを開催したところ、こどもたちもとても喜んでた。

学区ごとという固定観念を持ってしまうと、地域の教育力が半減するのではと懸念している。規模やできることが異なる中で、山間地でも市街地でも同じような利益が得られるような活動をしていかないといけない。

A 委員

スポーツクラブを事例にお話いただいた。中学校区ごとに地域資源が異なり、こどもの人数も異なるなかで、住んでいる地域でスポーツに触れる機会が変わることや、やりたいことができなくなることを避けたい。

こどもたちにしっかり教えながら、場合によっては越境を認めて交流できるような場づくりが重要なのではないかとのご指摘。地域資源が異なり、人が移動する必要があるため難しい部分もあるが、格差が広がらないような施策が必要。

G 委員

藤岡地区は、数十年前までは日本一若い街といわれ人口も多かったが、現在急速に人口が減ってきている。その中で、最終的に地元に戻らない可能性もあるが、こどもと地域がつながり、藤岡を好きなこどもたちを育てたいという思いで活動している。

たとえば、地域学校共働本部が地域の伝統を調べて関係者を招いて授業を行ったりしている。また、職場体験学習でも地域コーディネーターが体験先をコーディネートし、可能な限り中学校区で体験できるようにしている。

コミュニティ・スクールにおいても、区長をはじめ地域の様々な方々と学校が思いを共有し活動を進めているが、どうしても保護者・家庭が抜けてしまう。藤岡地区は新しく引っ越してきた家庭も多く一足飛びには難しいが、学校・地域・家庭の三者で、地域で一体となって連携していきたい。

A 委員

地域の方に関わってもらうことで、こどもたちにとって地域が自分の居場所になっていくということ。先ほど地元に戻ってくるか分からないとお話されたが、言い換えると大人としては帰ってきてほしいと思っているということ。帰っていけるような地域をつくっていく、そこに大人がどう関わりながらこどもを育てていくかということに関わってくる。

H 委員

教員を退職する際に地域学校共働本部が立ち上がったため、そのまま地域コーディネーターとなり活動している。

コロナ禍を境に様々なことが大きく変化した。たとえば、全学年で、縦割りで活動する機会が減り、行事も減った。また、子ども会も徐々になくなっている。こどもたちが放課後に公園で遊ぶ姿もあまり見られなくなり、SNSの世界に閉じこもっているように見える。学校が終われば習い事へ行く。今のこどもたちが大人になったらどのような大人になるのかと危機感も覚えている。

最近気が付いたこととして、居場所づくり事業でのこどもたちの様子は、以前放課後にこどもたちが公園に集まって遊んでいたときの様子と同じであるということ。学年に関わらず、高学年の子が低学年の子に声をかけて一緒に遊ぶ様子や、低学年の子が高学年の子に質問をしに行く様子が見られ、居場所の価値を感じている。こういった居場所をつくっていくことが我々の仕事。

A 委員

コロナ禍を機にこどもの世界が大きく変わった。コロナ禍で様々なものをやめて、面倒なことは再開せずにそのままやめてしまい、負担感を嫌う社会になってしまった。

やってみたら楽しかったから、大人もこどもと一緒に活動したら楽しかったからといったことで負担感が克服できるのではないか。

こどもたちが孤立をしていくように感じていたが、居場所でいっしょに過ごしていれば昔と変わらないという印象を持たれたということ。

I 委員

コロナ禍を経て学校のあり方も変わってきていると感じる。本校の地域コーディネーターは本校の卒業生で、コロナ禍の前は感謝の会等で体育館に集まっていたが、現在は「き

ずなカフェ」という名前で、自治区長や見守り活動をしてくださっている方をお呼びして2時間程度お話ししている。

きずなカフェの日は、休み時間に子どもたちが自主的に自治区長や見守り活動をしてくださっている方にお礼を伝えに行く様子が見られ、それを受けて地域の方々もまたいつでもサポートしに行くよと言ってくださり、良い形で循環している。コロナ禍を機に様々なことが減ってきているが、この機会に立ち止まって、地域とのつながりのあり方を変えていくチャンスとしたいと考えている。

地域コーディネーターは、LINEのオープンチャットを活用して、都合の良い時にできる範囲でサポートしてもらえよう、花壇の手伝いやタブレットのスクリーン貼り等のボランティアを募っている。オープンチャットに登録している方が、それぞれの得意なことで楽しみながら参加してもらえよう工夫しており、初めて参加した方や久しぶりに参加した方が孤立しないように細やかな声掛けもしている。

現在、300名程度の方が参加してくださっており、在校生の保護者だけでなく、地域の方や卒業した保護者も継続して参加してくださっており、学校として大変ありがたい。

A 委員

コロナ禍を機に触れ合う機会が減ってきている中で、今のお話を伺うと、子どもたちも地域の方と触れ合うことを求めているように感じる。

また、地域コーディネーターも、地域の方にお声掛けしてできることをできるように楽しみながらやっていただく関わりをつくられており、学校としても助かっているというお話。

子どもたちも地域の方と触れ合うことで、新しい関係ができ、自分の居場所ができることもあると思う。良い循環ができているということ。

J 委員

交流館は地域の拠点として様々な団体と関わる。小学校、中学校の地域コーディネーターとも頻りに連携しており、交流館祭に中学生がボランティアできてくれる。地域のコミュニティ会議では、特に青少年育成部会が活発に活動しており、子どもたちのために自主的に様々な企画をしている。

交流館の中学生ボランティアが中学校を卒業する際に、高校生になってもできる時にできることをするようなボランティアグループを4年前に立ち上げた。夏休みに4日間程度だが小学生に勉強を教えるスペースを作りたいと企画して実施するなど、少しずつ様々な方が様々なことを考えてつながっている。

交流館は赤ちゃんから高齢者まで様々な方が集まるため、どういうつながりができてなにができるか日々考えている。

A 委員

豊田市は各中学校区に1館交流館があり、しっかり職員を配置しており、これは豊田市の強みだと思う。交流館の職員は、地域の関係性、地域の中でだれがどんなことに精通し

ているかなどをよく把握している。

卒業生がグループを作って地域に貢献できることを交流館に提案しにくるといった話があったが、地域がこどもたちの居場所になっていて、何ができるかを考えて行動したくなる。そして交流館に行けば一緒にやってくれることが分かっている。そういう意味で、こどもたちが安心していられる居場所になっている。

K 委員

竜神中学校の地域学校共働本部では、体育祭のテント張りのボランティア募集や、職場体験のコーディネートのほか、授業支援として1年生のキャリア教育授業「キャリアチャレンジデイ」において、講師役として様々な職業の方を30～50人程度募集している。また、3年生の面接練習として、面接官役のボランティアを募っており、先生ではない初めて会った大人と面接練習ができるようにしている。また、書初め大会の受賞作品を交流館にも掲示し、地域の方やお仕事で学校に来られない保護者の方が作品を見にきてもらえるように調整したところ、地域からも好評だった。

ボランティアは保護者の方が主で、こどもの卒業と同時にボランティアをやめてしまうことが多かったが、今年は卒業後も継続して関わっていただけるような仕組みをつくることで、来年度以降も継続して関わっていただけることを期待している。

A 委員

地域コーディネーターが地域の方々と一緒になって学校がなかなかできないことを支えている。また、在校生の保護者の方だけでなく、地域全体で学校、こどもたちを支えていく仕組みをつくっているということ。

L 委員

青年会議所として、直近ではこどもを対象とした防災や多文化共生の取り組みを実施しており、生きる力共創委員会としては、今年は2回のイベントを実施。今年3月には、「キッザニアに学ぶ『生きる力』～直接体験がこどもの未来を育てる～」をテーマに、地域の大人向け研修を実施した。また9月には市内の小学生100名を対象としたプチ職業体験ができるイベントを企画している。

「生きる力」はこどもがミライを切り拓いていくために重要な力だと感じている。オンラインが急速に進化し疑似体験や間接体験が増えている中で、人と関わりながら直接体験する機会が減っていると感じている。キッザニアの講師からも、キッザニアができてから直接体験や職業体験がこどもの成長にとって良いと世間から認識されるようになり、職業体験のイベントが全国的に展開されるようになったと聞いている。

青年会議所は20歳～40歳の青年経済人で構成されている団体で経営者も多いため、学校の職業体験等の力になれることがあると思う。地域の学校や団体、行政、企業がうまく連携できれば、こどもたちのミライに繋がり、豊田市が全ての人にとってすみよいまちになると考えている。

A 委員

「生きる力」は人と関わることで生まれるのではないかというお話。キッザニアの空間はこどもの目線にあわせてつくられている。キッザニアはリピーターが多く、実は体験した直後より、体験から帰ってきて一週間後の方が、こどもたちがまた行きたくなるということがわかっている。なぜかという、体験から帰ってきて自宅で両親がこどもたちに仕事の話をするため。また親でなくても地域の方がこどもたちに仕事の話をするこどもたちが体験したくなる。こういったことは地域の力でできるため、ぜひ地域の方々に関わっていただきながら実施いただきたい。

B 委員

みなさまのお話を受けて感じたことは、交流館や地域コーディネーターなど、間に立つ人が重要になってくるということ、学区ごとに差がでてしまうというお話を受けて、こどもの権利、遊びの権利はこどもの成長にとって不可欠だということ、また大人もこどもも楽しいから継続できるということを感じた。

また、職業体験について、愛知県岡崎市で行われている「マープルタウン」という事例があり、岐阜県内でも展開されている。例えば、岐阜県可児市では、地元の中小企業が協力して、こどもたちが様々な職業を体験できるプログラムを実施している。

A 委員

みなさまのお話を受けて、学校と連携を取りながら次の世代をどう育成していくかについて、周囲の方と意見を交換していただきながら、みなさまご自身のお考え、周囲の方のお考えをメモしていただき、次回の審議会でご紹介いただきながらみなさまと議論していきたい。

次回の審議会は11月で少し期間が空くが、こどもを育てていくためにどう連携しているか、地域側としてどういう関わり方があるかについてご意見をいただきたい。

以 上